

二つの遣欧使節に関する書物の話

奥 正敬

フランシスコ・ザビエルが1549（天文十八）年に日本でキリスト教の布教を始めてから、徳川幕府が1600年代前半に布教を禁止して鎖国体制を確立するまでの間、大名の使節が2度にわたってローマへ派遣されました。ヨーロッパの人々はこれらの出来事を書物に残し、後世の研究者たちが歴史を検証する資料になりました。ここでは、本学図書館が所蔵している2つの使節について記された書物をご紹介します。

■巡察師ヴァリニャーノが企画した使節

ザビエルの初布教から丁度30年を経た1579（天正七）年、イエズス会の東洋巡察師であるアレサンドロ・ヴァリニャーノが来日しました。彼は布教地にセミナリオやコレジョなどの施設を作ると共に、布教報告を年報形式にするなど宣教活動に大きな改革をもたらしました。1581（天正九）年になると、実力者である織田信長に会って布教に対する感触を確かめています。

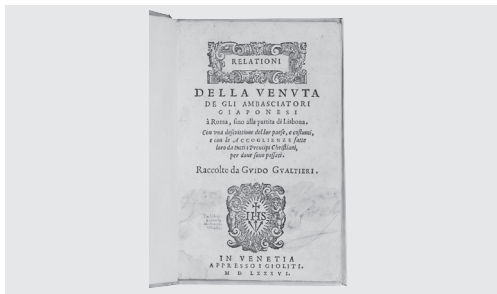
ヴァリニャーノはその後ローマへの使節派遣構想を打ち立てました。これは、切支丹大名の大友宗麟と大村純忠、それに有馬鎮貴の3人にローマ教皇へ宛てた親書を書かせ、その領内の少年で使節を編成してローマへ派遣するとするものです。この目的は、日本布教の成果をローマに示し、少年たちにはキリスト教を中心にしたヨーロッパ社会を見せ、将来の指導者に育成することでした。

この構想は実現して4人の少年が選ばれました。伊東マンショを正使とし、千々石ミゲルを副使に、また原マルチノと中浦ジュリアンを随員とするものです。そして、1582（天正十）年2（一）月にヴァリニャーノと共に長崎からヨーロッパへ出立しました。途中、少年たち使節一行はインドのゴアでヴァリニャーノと別れ、ケープタウン経由でポルトガルのリスボンに入港します。その後、スペインを横切り地中海からイタリアに渡りました。彼らは行く先々で大歓迎を受け、1585年にイタリアに入りローマ教皇グレゴリウス13世に拝謁するなど厚く遇されます。その直後、グレゴリウス13世が急逝したことから、一行は葬儀へ参列し、新教皇シクストゥス5世にも謁見して、1590（天正18）年に

無事帰国しました。

■ガルティエリの『天正遣欧使節記』

ヨーロッパでは教皇の帰天に伴う社会への衝撃はあったものの、使節一行の来訪はキリスト教の布教範囲が広がったものとして歓迎され、幾つかの書物で広く伝えられました。



中でも本学図書館が所蔵する“Relazioni della venuta de gli ambasciatori giapponesi”（写真）は、イタリアの文学者であるグイド・ガルティエリ（Guido Gualtieri, 16th cent.）の著作で、1586年にヴェネツィアから出版され、日本では『天正遣欧使節記』とよばれています。内容は使節のローマまでの旅や教皇に歓迎される様子が紙幅を占める中で、冒頭には日本の紹介や使節団を派遣する背景も書かれています。また、著者がシクストゥス5世の側近でもあったことからか、付録に新教皇が三大名に宛てた書簡と使節団歓迎の挨拶文が載せられるなど行き届いた配慮が窺えます。

■幕府の許可を得た政宗の使節

天正遣欧使節の派遣から31年が過ぎた1613（慶長十八）年の日本。天下の実権は織田信長から豊臣秀吉を経て徳川家康に移り、その家康も征夷大將軍の座を息子秀忠に譲っていました。しかし、家康は依然として徳川幕府の最高権力者であり、対外的には朱印船貿易を積極的に推し進めながら、国内のキリスト教布教についても比較的寛大な姿勢で臨んでいました。

こうした中で、仙台藩藩主の伊達政宗は幕府の許可を得て、同年10月にヨーロッパへ向けて家臣の支倉常長らを派遣しました。所謂、慶長遣欧使節です。一行はフランシスコ会宣教師のルイス・ソテロを案内役として太平洋を渡り、メキシコを横断し、キューバ島を経て1614年にスペインに到着しました。

常長は翌1615年にこの地で受洗し、国王フェリーペ3世に拝謁して政宗からの書状を渡し